

---

# ヒトカケラのアクマ

神の息

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒトカケラのアクマ

### 【Nコード】

N8046D

### 【作者名】

神の息

### 【あらすじ】

突然、悪魔に雇われることになったひとりの男。世に大量に存在する天使や悪魔との駆け引きを駆使し、悪魔の世界、自分の世界、最高の世界を築き上げることを決意する。

## 零話：呪う男の影

春も近付く季節、日も暮れ始めた空の下、細い路地を自転車で走る一人の男。

橙色の日光に照らされ光る緑色の眼には

悪魔が宿る。

空の端に燃えるその太陽を睨みつけ、また自転車をこぐ。

橙色の空は雲につつまれ、今にも涙をこぼしそうだ。

男はひたすら自転車をこぐ。

悪魔が羽根を広げ、羽ばたくように。

**巻話：雇われ悪魔（前書き）**

零話の前振りは関係ないと思っててください。

## 電話：雇われ悪魔

夕方、青っぽいカバンを肩に掛け、両手を学ランのポケットに突っ込んで、ゆつくりとした足取りで歩く男がいた。

彼の名は真咲まなき騎士夜きしや。中学2年、14歳、その他詳しい事は不明。名前以外、特に目立つ所は無く、少し大人っぽいくらいだ。真咲はとにかく冷静。中学生にしては、あまり学校を楽しめて無さそうだが、本人もそう思っているらしい。

今、彼は下校している所だ。家はそれほど学校からは遠くなく、10分程度で着くくらいだ。

その途中、道の端で困った様にきよろきよろとしている女性がいた。「どうかしたのですか？」

と真咲は問いかけた。真咲はいつも親切であるが、本人に自覚は無いそうだ。

「すいません、あの、病院の場所が分からなくて・・・」

と言いながら女性は真咲を見た。その女性の瞳はエメラルドグリーンに輝いていた。

「病院なら向こうのコンビニの所の交差点を真っ直ぐ行くとすぐ着きます。」

真咲は親切に答えた。このような女性への紳士な態度で、学校ではよくモテるらしい。

「向こうの方ね、助かったわ。ありがとうね。」

と言いながら女性は手を真咲の前にすつと出した。こういう握手はモテる真咲ならよくする様なことで、普通に軽く握手をした。

「じゃあ、お気をつけて。」

と親切に言った後、また真咲はポケットに手を入れ、家に帰っていた。

家に着くと真咲はポケットから鍵を出し、早い動作でドアを開けた。「ただいまー」

大きくも小さくもない声で言うと、

「おかえりー」

と返事が返ってきた。真咲が学校から帰ってくる時には、家には母だけが居る。父は仕事があり、夜遅くに帰ってくるのだ。

カバンを肩に掛けたままトントントンと音を立て、階段を上り、二階へ行く。真咲の家は二階建てで、真咲は自分の部屋を持っている。カバンを机の横に置いた後、部屋の端の方にあるベッドにトスンと座り、溜め息をついた。

部屋の窓から風が少し入ってきた。それと同時に、窓から小さなコウモリのような大きさの、緑の目をしていて、羽根のはえた、まさに小さな悪魔がひゅうつと入ってきた。

「真咲・騎士夜だな？」

一言だけ言って、その小さな悪魔は真咲をジロつと見た。真咲は驚く事も無く普通に答えた。

「ああ、その通りだ。とりあえずこちらでも君の名前を聞いておこう。」

「

「ジロ。おれはジロだ。悪魔界から下界ごうちに来た。誰か雇う人間を探していたんだが、お前に決めた。もう契約もしちまったからな。」

「契約？そんなものした覚えは無いけどね。」

真咲の言う通りだった。もしそんな契約があつた所でOKする訳も無い。

「さつき、握手をしたよな。アレで契約は成立していた訳だ。」

「へえ。ということは、俺はジロに雇われることになったってことか。」

「その通り。思った通り、飲み込みの早い奴だ。詳しい話はこれからする。とりあえずヨロシクだ。」

「ああ。よろしく。」

続く

壱話：雇われ悪魔（後書き）

感想くれるとうれしいです  
ぜひ別の作品も見えてってください

## 式話：全てを冷静に

ベッドに座ったまま、真咲はジロの方に視線を向けず、少し眠たそうにしていた。

「まったくといって動揺しないな。普通の奴ならびっくりして倒れる様な反応をするけどな」

ジロは少しだけつまらなそうに、あくびをした。

「でも、俺と契約したのはこの冷静さも見込みでの事だろう？」

不適な笑みを浮かべて、真咲は楽しそうに言った。

ジロはもつと楽しそうにケタケタ笑った。

「まあな。細かい事でいちいち驚かれてちゃメンドクセエからな。」

「さっきの女の人の緑色の目にも驚いちゃあいないよ、ジロ。」

自信ありげに真咲は言った。

「ほー。と少し驚いた様にジロが感心していた。」

「まあ、あのくらいのトリックには気付いてるか。てえ事は当然」

「握手が契約だって事ぐらい気付いてたよ。」

ジロが途中まで言った所で真咲が口を挟んだ。

真咲は、やはり冷静にしたまま、ジロに問う。

「俺は何か仕事でも与えられるのか？」

髪の毛をクリクリいじりながら言った。ジロは答える。

「うむ。まずは下界（こ）に潜む天使を捕まえてほしいんだ。今、騎士夜にとりついている悪魔（オレ）みたいに、自然に人にとりついている。そして二つ目は、色々な悪魔との取り引きを手伝ってほしい。さっきも言った通り、悪魔はいろんな人にとりついている。そいつらとの取り引きは人の姿になってる時にしか出来ない。」

「と言うことは、ジロ達は人間の姿になれるって事か？なら手助けも必要無いが。」

「いや、オレ達は人間の姿になる事はできない。が、人に憑依することはできる。だから騎士夜、お前の体を貸してくれ。ってことだ。」



」

「なるほどね。で、仕事ってそれだけ？」

少し楽しそうに質問する真咲。

「最後に一つ。仕事って言うよりは目標って所かな。」

楽しそうに聞く真咲に、少し嬉しそうにジロは言った。

「悪魔の頂点、魔男<sup>まだんじん</sup>になる。」

」

弐話：全てを冷静に（後書き）

感想求ム

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8046d/>

---

ヒトカケラのアクマ

2011年1月9日02時26分発行